

果樹

実況

1 ウメ

(1) 生育状況（園芸研究センター）

「紅サシ」の完熟落果は6月9日頃に始まり、落果盛期(落果率50%)は6月16日であった(図1)。落果盛期は「ウメ「紅サシ」の完熟落果の時期・果重の予測と樹体への影響(平成19年度普及に移す技術)」に基づいた予測と合致した。1樹あたりの総着果数は3,806果と平年の11,250果よりかなり少なかった(図2)。完熟落果盛期の果重は33.4gと平年の32.5gよりやや大きかった(表1)。

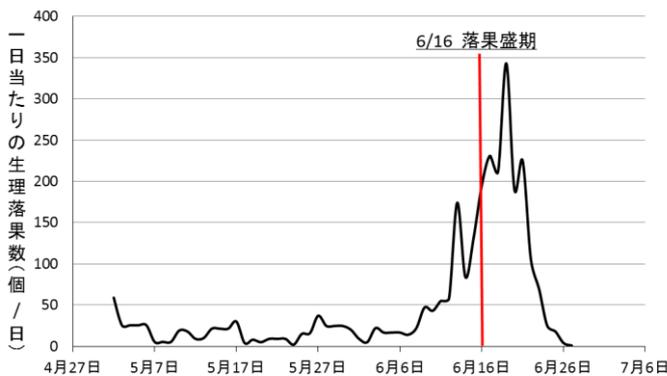


図1 1日当たりの生理落果数の推移

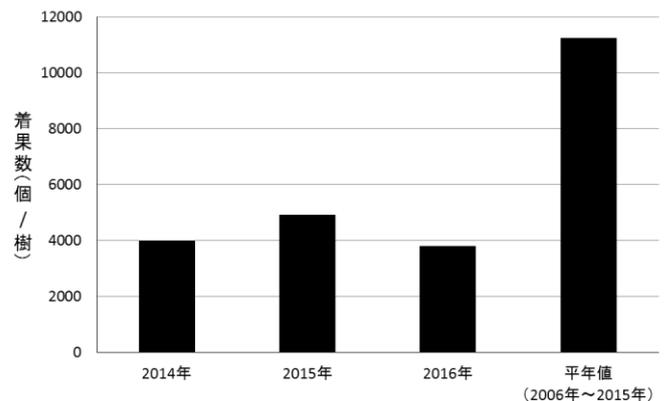


図2 「紅サシ」の年次ごとの総着果数

表1 「紅サシ」年次ごとの完熟落果状況

年度		完熟落果始期	完熟落果盛期	完熟落果盛期果重(g)
2016	(H.28)	6月9日	6月18日	33.4
2015	(H.27)	6月16日	6月24日	30.6
2014	(H.26)	6月25日	6月28日	38.5
2013	(H.25)	6月24日	6月30日	25.4
2012	(H.24)	6月27日	7月3日	35.2
平年値	(H.21~H.27)	6月24日	6月29日	32.5

(2) 地域状況

広域選果場の集荷は6月30日に終了し(集荷日数24日間)、出荷量は647t(前年対比80%)であった。5月の高温により熟度が進み、収穫盛期は前年に比べ2~3日、平年に比べて10日以上早くなった。また、今年も前年に引き続き大玉傾向で、2L以上の規格割合がきわめて高かった。一次加工漬け込み量は、150t以上を見込んでいる。

2 ナシ

(1) 生育状況（農業試験場）

7月21日現在の果実横径は「幸水」が79.7mm(平年62.6mm、前年77.1mm)であり、平年・前年より大きく推移している。「豊水」は69.3mm(平年57.7mm、前年66.6mm)であり、平年・前年より大きく推移している。

黒星病がわずかに見られるが、他に目立った病害虫の発生はない。

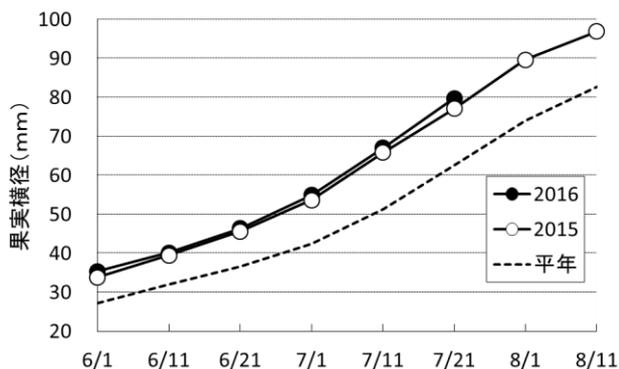


図3 「幸水」の果実肥大(福井農試)

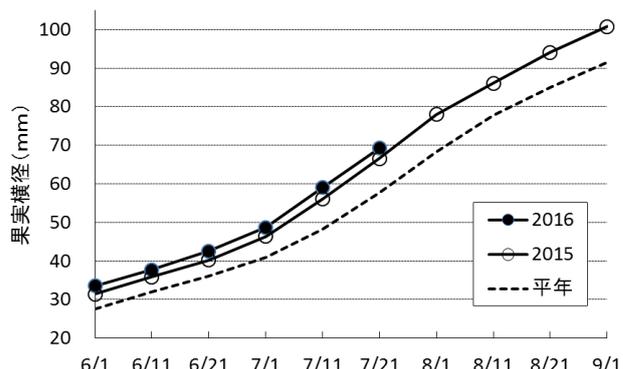


図4 「豊水」の果実肥大(福井農試)

(2) 地域状況

坂井管内の果実肥大(7月26日現在)は、「幸水」の果実横径が75.1mm(前年75.5mm)で平年より7mm程度大きく、「豊水」が71.8mm(前年66.9mm)で平年より11mm程度大きい。「幸水」で裂果が見られるが全体としては少ない。

坂井管内の「幸水」は7月21日から収穫が始まり、8月上旬までの出荷を予定している。

3 カキ

(1) 生育状況 (農業試験場)

7月21日現在の果実横径は、「刀根早生」が57.6mm(平年53.0mm、前年60.0mm)であり、平年より大きく、前年より小さく推移している。「平核無」が60.2mm(平年51.3mm、前年60.8mm)であり、平年より大きく、前年並みに推移している。生理落果は少ない。また、目立った病害虫の発生は見られない。

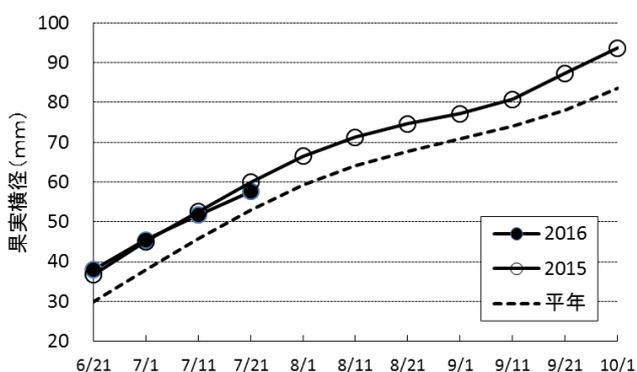


図5 「刀根早生」の果実肥大(福井農試)

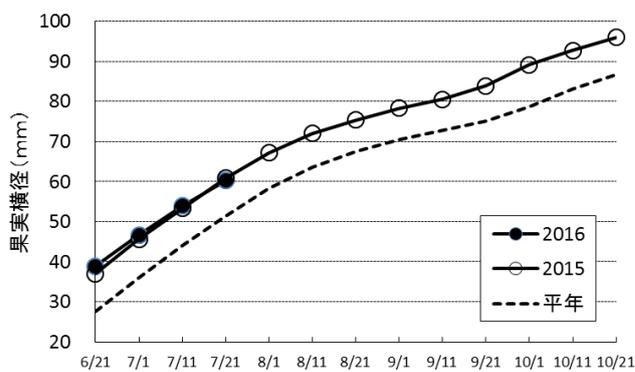


図6 「平核無」の果実肥大(福井農試)

(2) 地域状況

坂井管内・丹南管内ともに着果はほぼ良好である。坂井管内における果実肥大は7月14日現在、「刀根早生」が60.7mm、「平核無」が58.7mmで、両品種とも昨年と同程度で、平年より大きい。

4 イチジク

(1) 地域状況

若狭管内では、新梢伸長にバラつきがみられるものの概ね順調に生育しており、7月中旬から順次摘心作業が行われている。収穫時期は平年並みの8月初旬からの見込みである。

5 ブドウ

(1)地域状況

6月中旬から早生品種を中心に着色が始まっており、7月下旬から集荷が始まると見込まれる。「ふくぷる®」としての販売が3年目となり、出荷量の増加を見込んでいる。

対 策

1 各樹種共通

(1)干ばつ防止

盛夏期の高温乾燥により土壌が乾燥すると、葉の萎れ・ロール・黄化・落葉などが発生し、樹体生育に悪影響を及ぼす。さらに、果実の肥大不良や陽光面の日焼けなど品質にも影響するので以下の各項目で対策を行う。

ア かん水

乾燥が進んでからでは手遅れなので、梅雨明け後は早めのかん水を心がける。高温条件下で無降雨日が7~10日程度続くと干ばつ症状が出てくる。7~10日間隔で、1回当たり15~20mm程度のかん水を実施する。特に、根張りの不十分な幼木や浅根性の樹種、砂質浅耕土の圃場では被害を受けやすいので早めの対策を実施する。

イ 草刈り、有機物マルチ

雑草との土壌水分の競合を回避するために、草刈りを実施する。また、刈り倒した雑草や稲わらなどを樹冠下に敷いて、地温の上昇を防ぎ、土壌表面からの水分蒸散を抑える。

ウ 病虫害防除

乾燥が続くとハダニ類・スリップス類・カメムシ類などが発生しやすい。圃場をこまめに巡回して、発生がみられたら農薬使用基準に従って早期に薬剤散布する。

(2)台風対策

台風情報に十分注意して、接近が予想される場合には、落果・倒木防止対策を行う。特にナシでは、棚面の動揺を防ぐために、あおり止めの点検を行う。また、防鳥・防蛾ネットは固定紐のゆるみをなくし、ネットの外側からビニールバンドで固定するなどして風であおられるのを防ぐ。固定は必ずアンカー部に接続する。ネットや棚の強度以上の強風が予想される場合はネットを外す。

2 ウメ

(1)病虫害防除

連年安定生産するには、収穫後から秋まで健全な葉を保ち、貯蔵養分を十分に蓄積させることが重要である。数日に一度は圃場を見回って、環紋葉枯病や葉炭そ病など落葉病害の発生を観察し、発生初期に農薬使用基準に基づき薬剤防除を行う。

害虫では、モンクロシャチホコの発生時期である。早期発見に努め、分散前の若齢幼虫期に捕殺する。若齢期を見逃し幼虫の分散が進んだ場合は薬剤散布を行う。

花枝出荷予定者は、8月下旬から9月上旬のウメシロカイガラムシ第3世代幼虫発生時期を把握した上で、アプロード(水和剤またはフロアブル)剤により適期に防除する。

(2) 夏季せん定

夏季せん定によって樹冠内部の葉にも光を当てるように受光体制を改善することで、花芽や枝梢が充実する。特に「新平太夫」や「福太夫」では花芽の着生が良好になり、安定多収につながる。一方、「紅サシ」や樹勢が低下した樹では、枯れ枝、着葉の少ない側枝、立ち枝先端から発生した新梢などを中心とした軽めの処理とする。

(3) 芽接ぎ

苗木養成や品種更新(=高接ぎ)のための芽接ぎの適期は8月下旬～9月中旬である。

春の切接ぎでは専用の接ぎ木ナイフを要するが、夏季の芽接ぎはカッターナイフ(大型)が利用でき、技術的にも比較的簡単で、穂木も少量で済む。

ただし、芽接ぎによる高接ぎでは、接ぎ木を行った後から落葉期までに枝(新梢)が肥大することにより、接ぎ木後のゆ合が不十分なため穂木が土台からはがれてしまうことも少なくない。穂木の活着率を高めるために、新梢は細めの枝(直径8mm前後)を選び、接ぎ木は適期に行う。

(4) 一次加工(天日干し)

天日干し(乾燥)は、貯蔵中の変質やカビの発生を防ぎ、果肉を軟らかくして風味を増すことが目的である。

漬け込み後、約1か月経過したら、漬け桶(おけ)からウメを引き上げる。ウメをせいろなどに入れて、掛け流しの水の中で数回ゆすって水洗いし、乾燥場へ移す。水洗いの際に「白干梅整列板」を用いると、作業能率を高めることができる。

乾燥日数は夏の晴天条件下で、Lサイズ3日間、2Lサイズ3.5日間、3Lサイズ4日間程度とし、ブリックス糖度計測定値で33～35を目安に調整する。

高温と強い日射条件で天日干しを行うと、乾燥が急激に進むため、表面に比べて内部の色づきが不十分になる。高温強日射条件下の天日干しでは、使用していないせいろや寒冷紗などでせいろ全体を覆い、果実に当たる日射を和らげるなどして、日数をかけて干す。天日干し中は、塩が吹いてきても、水をかけたり、夜露にあてたりしないようにする。

天日干しが終わったら、室内に取り込んだ後で、果実の温度が常温に下がってから、キズ果などを選別しながらタル詰め作業を行う。

3 ナシ

(1) 仕上げ摘果

「豊水」の仕上げ摘果を行う。「豊水」は摘果時に肥大の良好な果実を残したつもりでもばらつきが目立ってくる。この時期に小さい果実は肥大の回復を期待できないので、小玉果を優先して摘果し、成木で最終着果量の11,000果/10aに調節する。

(2) 収穫

「幸水」の収穫期(カラーチャート値4.0到達日)を、開花日と細胞分裂期(開花後33日間)の平均気温に基づいて推定すると、平均収穫日は8月18日と予測され、収穫開始はこれより4～5日前と考えられる。なお、ジベレリン処理した果実は、無処理より収穫時期が7日程度早くなる。

カラーチャートによる熟期の判定では、チャート値4.0で果実品質がもっとも良くなるが、日持ち性を考慮した場合3.0以上が収穫の目安になる。「幸水」の収穫期は真夏にあたるため、果実温が高く日持ちが悪くなりがちである。日持ちをよくするためには、果実温が上昇する前の早朝に収穫するとと

もに、直射日光によって収穫後の果実温度が上がらないように注意を払う。また、選果場までの運搬中に果実に傷がつきやすいので、コンテナと果実、果実と果実がぶつからないように緩衝材を入れる。

(3) 礼肥

礼肥は果実生産によって低下した葉の機能回復と貯蔵養分の蓄積を目的として施用する。収穫が終わり次第、すみやかに施す。「幸水」では窒素成分で10 a 当たり4~6kgを目安とし、硝酸態窒素主体の速効性肥料を施す。

(4) 病虫害防除

カメムシ類、シンクイムシ類は、8月にも成虫発生がピークが予想される。発生最盛期に防除を行うよう心がける。ハダニ類については常に発生密度を観察して、密度が高くならないうちに防除する。カメムシ類はスギ・ヒノキ等の寄主植物が近くにある園では飛来数が多くなるので注意する。また、主に夜間に果実を加害するので、薬剤防除は夕方に行うとより効果的である。

4 カキ

(1) 仕上げ摘果

仕上げ摘果が遅れている園では早急に行う。仕上げ摘果を怠ると小玉果になる。病虫害被害果・キズ果・奇形果などを優先して摘果し、最終的には20~30cmの結果母枝1枝につき3果程度を目安にする。ただし、葉数5枚以下の結果枝には着果させない。また、高温多照条件では日焼け果が多発するので、上向き果など直射日光を強く受ける果実は仕上げ摘果で落とす。

(2) 新梢管理

樹冠内部の通風・採光を妨げている枝や充実不良枝、骨格枝の背面から発生している徒長枝などは、炭疽病・すす点病などの発生を助長するので適当に間引く。なお、梅雨明け後の強い直射日光は幹の日焼けをおこすので、適度にふところ枝を残す。

また、8月以降は果実重が増加し、枝が下垂してくるので、枝吊りや支柱による補強を行う。

(3) 品質向上・汚損果防止対策

果実成熟期の園地環境の改善対策によって着色向上や汚損果防止が期待できる。

樹冠下に有孔シルバーマルチを敷設すると、着色向上や湿度低下による汚損果の軽減効果がある。8月下旬に資材の準備や草刈りを行い、9月上旬になってからシルバーマルチの敷設を行う。

(4) 病虫害防除

病気ではうどんこ病・炭疽病・落葉病、害虫ではカキミガ・スリップス類・カメムシ類の防除を行う。

5 イチジク

(1) 収穫

イチジクの完熟果は風味があっておいしいが、未熟果は甘味や風味が乏しくなるため、熟度をよく確認して収穫する。成熟期の目安は着果後約75~80日で、着色始めから完熟までの期間は4~6日と短い。また、完熟1日後には過熟になってしまうので収穫遅れに注意する。

収穫の判定は下表を参考に、果実の下垂程度、着色度、果肉の硬さから判断する。福井農試で作成した果実カラーチャートを利用すると便利である。

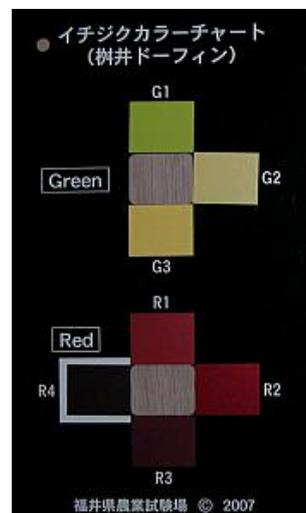


表2 時期別のイチジク収穫基準

時期	果皮色	果実の軟らかさ	注意点
8月	果皮色の濃淡ではなく、果実全面に着色（R1以上）している。	軟らかいもの （果実硬度0.3kg以下）	・1日で急激に軟化するので、取り遅れに注意すること。
	着色不良で緑色部分が多い果実は、G2以上での収穫を目標とする。		・色が極端に薄いあるいは着色する前に柔らかくなる場合は、枝密度など日照条件が悪いので、適正管理を行う。
9月	基本的には8月に準じる。 （R1～R2以上で収穫）	やや軟らかいもの （果実硬度0.5kg以下）	・天候によって着色程度などが変化することを考慮する
10月	果実全面に着色し、果皮色も十分に濃いもの（R3程度）。	やや硬くても収穫可能 （果実硬度0.7kg以下）	

カラーチャートによる収穫適期の把握(福井農試,平成19年度普及に移す技術)

6 ブドウ

(1) 収穫

着色が進むとともに、糖度が上昇し酸が減少する。品種によって異なるが、糖度18度以上、酸度0.4～0.7を目安に収穫し、早どりに十分注意する。新鮮さを保ち、収穫後の日持ちを良好にするため、収穫は涼しい早朝に行う。また、果粉(ブルーム)がきれいに付いていると商品価値が高まるため、収穫の際は、果軸をつまみ果粒に直接触れないように注意する。